

# 紅玉

泉鏡花

青空文庫



時——現代、初冬。

場所——府下郊外の原野。

人物——画工。侍女（鳥の仮装したる）。貴夫人。老紳士。少紳士。小

児五人。——別に、三羽の鳥（侍女と同じ扮装）。

小児一 やあ、停車場ステーションの方の、遠くの方から、あんなものが遣やつて来たぜ。

小児二 何だいく。

小児三 あゝ、大なものおおきを背負しよつて、蹠よろよろ々々来るねえ。

小児四 影法師まで、ぶら／＼して居るよ。

小児五 重いんだらうか。

小児一 何だ、引越ひっこしかなあ。

小児二 構ふもんか、何だつて。

小児三 御覽よ、脊せなよりか高い、障子見たやうなものを背負しよつてるから、凧たこが歩ある行いて来るやうだ。

小児四 糸をつけて揚げる真似工して遣らう。

小児五 遣れく、おもしろい。

凧を持つたのは凧を上げ、独樂を持ちたるは独樂を廻す。手にもなき一人、一方に向ひ、凧の糸を手繰る真似して笑ふ。

画工 (杵張のまゝ、絹地の画を、やけに紐からげにして、薄汚れたる背広の背に負

ひ、初冬、枯野の夕日影にて、あかくと且つ寂しき顔。酔へる足どりにて登場) :

落第々々、大落第。(ぶらつく体を杖に突掛くる状、疲切つたる樵夫の如し。し

ばらくして、叫ぶ) 畜生、状を見やがれ。

声に驚き、且つ活ける玩具の、手許に近づきたるを見て、糸を手繰りたる小児、衝

と開いて素知らぬ顔す。

画工、其の事には心付かず、立停まりて嬉戯する小児等をす。

よく遊んでるな、あゝ、羨しい。何うだ。皆、面白いか。

小児等、彼の様子を見て、忍笑す。中に、糸を手繰りたる一人。

小児三 あゝ、面白かつたの。

画工 (管をまく口吻) 何、面白かつた。面白かつたは不可んな。今の若さに。……小

児どもをつかまへて、今の若さも変だ。(笑ふ)は、は、面白なまけかつたは心細い。過去すぎぎつた事のやうで情なさけない。面白いと云へ。面白なまけがれ、面白なまけがれ。尚なほ其の上に面白なまけく成れ。む、何どうだ。

小児三 だつて、兄にいさん怒おこるだらう。

画工 (解し得ず)俺おこが怒おこる、何を……何を俺おこが怒おこるんだ。生命いのちがけで、描かいて文部省の展覧会で、平へつくばつて、可いいか、洋服の膝ひざを膨はらまして膝行いざつてな、い、図ぢやないぜ、審査所のお玄関で頓とん首再拜さいはいと仕つかまつつた奴を、紙鉄砲かみてつぱうで、ポンと撥はねられて、ぎやふんとまるつた。それでさへ怒おこり得えないで、悄すこ々と杖つえに縋すがつて背負しよつて帰る男ぢやないか。景気よく馬肉けとばしで呷あおつた酒なら、跳ねも、いきりもしようけれど、胃のわるい処ところへ、げつそりと空腹すきばらと来て、蕎麦そばともいかない。停車場前で饅飴うぜんで飲んだ、臟腑ぞうふが宛然さながら蚯蚓みみずのやうな、しツこしのない江戸児擬えどっこまがいが、何どうして腹はらなんぞ立て得えるものかい。ふん、だらしやない。

他たの小児こどもはきよろしく見て居る。

小児三 何だか知らないけれどね、今、向うから来る兄にいさんに、糸目をつけて手繰たぐつて居たんだぜ。

画工 何だ、糸を着けて……手繰つたか。いや、怒りやしない。何の真似だい。

小児一 兄さんがね、然うやつてね、ぶら／＼来た処がね。

小児二 遠くから、まるで以て、凧の形に見えたんだもの。

画工 は、あ、凧か。(背負つてる絵を見る) む、其処で、(仕形しつゝ)と遣つて面

白がつて居たんだな。処で、俺が慪う近く来たから、怒られやしないかと思つて、其の

悪戯を止めたんだ。だから、面白かつたと云ふのか。……かつたは寂しい、つまらな

い。壮に面白がれ、もつと面白がれ。さあ、糸を手繰れ、上げろ、引張れ。俺が、凧に

成つて、上つて遣らう。上つて、高い空から、上野の展覧会を見て遣る。京、大阪を見

よう。日本中を、いや世界を見よう。……さあ、あの兎来て煽れ、それ、お前は向

うで上げるんだ。さあ、遣れ、遣れ。(笑ふ) は、面白。

小児等しばらく逡巡す。画工の機嫌よげなるを見るより、一人は、画工の背を抱

いて、凧を煽る真似す。一人は駈出して距離を取る。其の一人。

小児三 やあ、大凧だい、一人ぢや重い。

小児四 うん、手伝つて遣ら。(と独楽を懐にして、立並ぶ)——風吹け、や、吹け。

山の風吹いて来い。——(同音に囃す。)

画工 (あふりたる児の手を離るゝと同時に、大手を開いて) 恚う成りや風絵だ、提灯  
 屋だ。そりや、しやくるぞ、水汲むぞ、べつかつこだ。

小児等の糸を引いて駈るがまゝに、ふらくと舞台を飛廻り、やがて、樹根にと  
 成りて、切なき呼吸つく。

暮色 到る。

小児三 風は切れたつた。

小児一 暗く成つた。——丁ど可い。

小児二 又、……あの事をしよう。

其の他 遣らうよ、遣らうよ。——(一同、手はつながず、少しづつ間をおき、くるりと  
 輪に成りて唄ふ。)

青山、葉山、羽黒の権現さん

あとさき言はずに、中はくぼんだ、おかまの神さん

唄ひつゝ、廻りつゝ、繰返す。

画工 (茫然として黙想したるが、吐息して立つて此を視む。) おい、おい、其は何の  
 唄だ。

小児一 あゝ、何の唄だか知らないけれどね、恚うやつて唄つて居ると、誰か一人踊出すんだよ。

画工 踊る？ 誰が踊る。

小児二 誰が踊るつて、此のね、環の中へ入つて踞んでるものが踊るんだつて。

画工 誰も、入つては居らんぢやないか。

小児三 でもね、気味が悪いんだもの。

画工 気味が悪いと？

小児四 あゝ、あの、其がね、踊らうと思つて踊るんぢやないんだよ。ひとりでにね、踊るの。踊るまいと思つても。だもの、気味が悪いんだ。

画工 遣つて見よう、俺を入れろ。

一同 やあ、兄さん、入るかい。

画工 俺が入る、待て、(画を取つて大樹の幹によせかく) さあ、可いか。

小児三 目を塞いで居るんだぜ。

画工 可、此の世間を、酔つて踊りや本望だ。

青山、葉山、羽黒の権現さん

小兒等唄ひながら画工の身の周囲を廻る。環の脈を打つて伸び且つ縮むに連れて、画工、殆んど、無意識なるが如く、片手又片足を異様に動かす。唄ふ声、愈々冴えて、次第に暗く成る。

時に、樹の蔭より、顔黒く、嘴黒く、鳥の頭して真黒なるマント様の衣を裾まで被りたる異体のもの一個頭れ出で、小兒と小兒の間に交りて斉しく廻る。

地に踞りたる画工、此の時、中腰に身を起して、半身を左右に振つて踊る真似す。

続いて、初の黒きものと同じ姿したる三個、人の形の鳥。樹蔭より頭れ、同じく小兒等の間に交つて、画工の周囲を繞る。

小兒等は絶えず唄ふ。いづれも其の怪き物の姿を見ざる趣なり。あとの三羽の鳥出でて輪に加はる頃より、画工全く立上り、我を忘れたる状して踊り出す。初手の鳥も

ともに、就中、後なる三羽の鳥は、足も地に着かざるまで跳梁す。

彼等の踊狂ふ時、小兒等は唄を留む。

一同（手に手に石を二ツ取り、カチ／＼と打鳴らして）魔が来た、でん／＼。影がさいた、もんもん。（四五度口々に寂しく囃す）真個に来た。そりや来た。

小兒のうちに一人、誰とも知らず慥く叫ぶとともに、ばら／＼と、左右に分れて逃

げ入る。

木の葉落つ。

木の葉落つる中に、一人の画工と四個の黒き姿と頻に踊る。画工は靴を穿いたり。

後の三羽の鳥皆爪尖まで黒し。初の鳥ひとり、裾をこぼるゝ褌に、足白し。

画工（疲果てたる状、と仰様に倒る）水だ、水をくれい。

いづれも踊り留む。後の鳥三羽、身を開いて一方に翼を交はしたる如く、腕を組合せつゝ立ちて視む。

初の鳥（うら若き女の声にて）寝たよ。まあ……だらしない事。人間、恚うは成りた

くないものだわね。——其のうちに目が覚めたら行くだらう——別にお座敷の邪魔にも

成るまいから。……どれ、（樹の蔭に一むら生茂りたる薄の中より、組立てに交叉し

たる三脚の竹を取出して据ゑ、次に、其上に円き板を置き、卓子の如くす。）

後の鳥、此の時、三羽とも無言にて近づき、手伝ふ状にて、二脚のズツク製、おなじ

組立ての床几を卓子の差向ひに置く。

初の鳥、又、旅行用手提げの中より、葡萄酒の瓶を取出だし卓子の上に置く。後

の鳥等、青き酒、赤き酒の瓶、続いてコップを取出だして並べ揃ふ。

やがて、初の鳥、一挺の蠟燭を取つて、此に火を点ず。

舞台明くなる。

初の鳥（思ひ着きたる体にて、一ツの瓶の酒を玉盞に酌ぎ、燭に翳す。）おゝ、綺麗だ。燭が映つて、透徹つて、いつかの、あの時、夕日の色に輝いて、丁ど東の空に立つた虹の、其の虹の目のやうだと云つて、薄雲に翳して御覧なすつた、奥様の白い手の細い指には重さうな、指環の球に似てること。

三羽の鳥、打傾いて聞きつゝあり。

あゝ、玉が溶けたと思ふ酒を飲んだら、どんな味がするだらうねえ。（鳥の頭を頂きたる、咽喉の黒き布をあけて、少き女の面を顕し、酒を飲まんとして猶予ふ）あれ、こゝは私には口だけれど、鳥にすると丁ど咽喉だ。可厭だよ。咽喉だと血が流れるやうでねえ。こんな事をして居るんだから、氣に成る。よさう。まあ、独言を云つて、誰かと話をして居るやうだよ……

（四辺をす）然うゝ、思つた同士、人前で内証で心を通はす時は、一ツに向つた卓子が、人知れず、脚を上げたり下げたりする、幽な、しかし脈を打つて、血の通ふ、其の符牒で、黙つて居て、暗号が出来る、何時も奥様がおつしやるもんだから。

——卓テエブル子こさん（卓をたゞく）殊ことにお前まへさんは三みつツ脚あしで、狐こつくり狗い狸りさん、其そののまゝだもの。活いきてるも同じだと思おもふから、つい、お話をしたんだわ。しかし、うつかりして、少々大事だいじなことを饒しゃべ舌べつたんだから、お前まへさん聞きいたばかりにして置いておくれ。誰たれにも言いつては不可いけないよ。一寸ちよいと、注ついだ酒しよを何どうしよう。ああ、いゝ事ことがある。（酔よ倒たおれたる画工えこうに近ちかづく。後のちの鳥とり一いつツ、同おなじく近ちか寄りて、画工えこうの項うなじを抱いだいて仰あおむ向けにす。）

酔よばららひひさん、さあ、冷ひや水みづ。

画工えこう（飲のみながら、現うつにて）あゝ、日ひが出でた、が、俺おれは暗やみ夜よだ。（其そのまゝ寝ね返かへる。）

初はつの鳥とり 日ひが出でたつて——赤あかい酒しよから、私わたしの此このの鳥とりを透とおかして、まあ。——画えに描かいた太お陽ひさまの夢ゆめを見みたんだらう。何なにだか謎なぞのやうな事ことを言いつてるわね。——さあ、お寝ね室むまこしらへをして置おきませう。（もとに立たち戻もどりて、又また薄すすきの中なかより、此こののたびは一いつ領りやうの天てん幕まくを引ひ出し、卓テエブル子こを蔽おほうて建たて廻まわはす。三みつ羽うの鳥とり、左ひだり右みぎより此このを手て伝つふ。天てん幕まくの裡うちは、見みぶつ席せきより見みえざるあつらへ。）お楽たのしみだわね。（天てん幕まくを背うしろ後ごにして正まへ面に立たつ。三みつ羽うの鳥とり、其そのの両ふた方た方にむす。）

もう、すつかり日ひが暮くれた。（時ときに、はじめてフト自おの分の他ほかに、鳥とりの姿すがたありて立たてるに心こころづ付づく。されどおのが目めを怪あやしむ風ふう情せい。少すこしづゝ、あちこち歩ある行く。歩ある行くに連つれて、

鳥の形動き絡まとふを見て、次第うたがに疑惑がいを増し、手を挙げれば、鳥等らも同じく挙げ、袖そでを振動ふりうごかせば、斉ひとしく振動かし、足を爪立つまたつれば爪立ち、踞しゃがめば踞むを透すかし視ながめて、今はしも激しく恐怖し、慌あわたしく駈出かけいす。）

帽子まぶかを目深まぶかに、オーバーコートの鼠ねずみ色いろなるを被き、太スキ洋杖ステツキを持てる老紳士、憂ゆ

鬱ううつなる重き態度にて登場。

初はじめの鳥ハタと行当ゆきあたる。驚いて身を開ひらく。紳士其その袖を捉とらふ。初はじめの鳥、遁のがれんとして威おどす真似して、かあく、と鳥の声をなす。泣くが如き女の声なり。

紳士 こりや、地獄の門を背負しよつて、空を飛ぶ真似をするか。（掴つかみ）ひしが如くにして突つ離きはなす。初はじめの鳥、と地に坐す。三羽の鳥は故わざとらしく吃きつき驚きょうの身振みぶりをなす。）地を這はふ鳥は、鳴く声こゑが違ちがふぢやらう。うむ、何どうぢや。地を這はふ鳥は何と鳴くか。

紳士 は、あ、御免なさいましと鳴くか。（繰返して）御免なさいましと鳴くぢやな。

初はじめの鳥 はい。

紳士 うむ、（重うなずく頷く）聞えた。とに角かく、汝きさまの声は聞えた。——こりや、俺おれの声こゑが分わるか。

初の鳥 えゝ。

紳士 俺の声が分るかと云ふんぢや。こりや、面つらを上げろ。——何どうだ。

初の鳥 御ごぜんさま前様、あれ……

紳士 ステッキ（杖を以つて、其の裾すそをおさ）ばさく騒やぐな。槍やりで脇腹わきを突つかれる外ほかに、樹の上

へえあが得からだ上る身体からだでもないに、羽めろばたきをするな、女めろ郎う、手てを支ついて、静じつとして口くちをきけ。

初の鳥 まこと真まことに 申もうしわけ 訳わけのございません、飛とんだ失し礼れをいたしました。……先せん達だつて、奥おく様

がお好よみのおく催そしで、おや邸しきに園遊会えんぎうかいの仮装かりまうがございました時とき、私わたくしがいたしました、あの、

此このこしらへが、余あまりよく似に合あつたと、皆みな様が然そうおつしやいましたものでございます

から、つい、心こころ得えちが違ちがひな事ことをはじめました。あの——後あとで、御ご前ぜん様が御ご旅りょ行ぎやうを遊あそびし

ましたお留と守しゅ中ちゆうは、おや邸しきにも御ご用ようが少すくうございますものですから、自みづか分の買かいもの、用よう達だ

しだの、何なにのと申まうして、奥おく様がお暇ひまを頂たまいては、こんな処へ出でて参まりまして、偶たまに通とり

ますものを驚おどかしますのが面おも白しろくて成なりませんので、つい、あの、癖くせになりまして、今いま

晩ばんも……旦たん那な様が申まう訳わけのございません失し礼れをいたしました。何どうぞ、御ご免めん遊ぎやうばして下くだ

さいまし。

紳士 言いふ事ことは其そのだけか。

初の鳥 はい？（聞返す。）

紳士 俺に云ふ事は、それだけか、女郎。

初の鳥 あの、（口籠る）今夜は何ういたしました事でございますか、私の形……あの、

影法師が、此の、野中の宵闇に判然と見えますのでございます。其さへ気味が悪う

ございますのに、気をつけて見ますと、二つも三つも、私と一所に動きますのでござ

いますもの。

三方に分れてゐむ、三羽の鳥、また打領く。

もう可恐く成りまして、夢中で駈出しましたものですから、御前様に、つい——あ

の、そして……御前様は、何時御旅行さきから。

紳士 俺の旅行か。ふゝん。（自ら嘲ける口吻）汝たちは、俺が旅行をしたと思ふか。

初の鳥 はい、一昨日から、北海道の方へ。

紳士 俺の北海道は、すぐに俺の邸の周囲ぢや。

初の鳥 はあ、（驚く。）

紳士 俺の旅行は、冥土の旅の如きものぢや。昔から、事が、恚う云ふ事が起つて、其が

破滅に近づく時は、誰もするわ。平凡な手段ぢや。通例過ぎる遣方ぢやが、為んと云

ふ事には行かなかつた。今云うた冥土の旅を、可厭ぢやと思つても、誰もしないわけには行かぬやうなものぢや。又、汝等<sup>きさまら</sup>とても、恚<sup>こ</sup>う云ふ事件の最後の際には、其の家の主人か、良人<sup>おとと</sup>か、可<sup>え</sup>えか、俺<sup>あ</sup>がぢや、或<sup>ある</sup>手段として旅行するに極<sup>きま</sup>つとる事を知つて居る。汝<sup>きさま</sup>は知らないでも、怜<sup>りこう</sup>惻<sup>あ</sup>れな彼は知つて居る。汝<sup>きさま</sup>とても、少しは分つて居らう。分つて居て、其の主人が旅行と云ふ隙間<sup>すきま</sup>を狙<sup>ねら</sup>ふ。故<sup>わざ</sup>と安心して大胆<sup>ふらち</sup>な不埒<sup>ふち</sup>を働く。うむ、耳<sup>みみ</sup>を蔽<sup>おほ</sup>うて鐸<sup>すず</sup>を盗むと云ふのぢや。いづれ音の立ち、声の響くのは覚悟ぢやらう。何も彼<sup>か</sup>も隠<sup>おほ</sup>さず  
に言つて了<sup>しま</sup>へ。何時<sup>いつ</sup>の事か。一体、何時頃<sup>いつころ</sup>の事か。これ。

侍女 何時頃<sup>いつころ</sup>とおつしやつて、あの、影法師の事でございませうか。其は唯<sup>ただ</sup>今<sup>いま</sup>……

紳士 黙れ。影法師か何<sup>なに</sup>か知らんが、汝等<sup>きさまら</sup>三人の黒い心が、形にあらはれて、俺<sup>あ</sup>の邸<sup>やしき</sup>の

内外を横行しはじめた時だ。

侍女 御免遊ばして、御前<sup>ごぜん</sup>様<sup>さま</sup>、私<sup>わたくし</sup>は何にも存じません。

紳士 用意は出来とる。女郎<sup>めろう</sup>、俺<sup>あ</sup>の衣兜<sup>かかし</sup>には短銃<sup>ピストル</sup>があるぞ。

侍女 えゝ。

紳士 さあ、言へ。

侍女 御前<sup>ごぜん</sup>様<sup>さま</sup>、お許し下さいまし。春の、暮<sup>くれ</sup>方<sup>がた</sup>の事でございます。美しい虹<sup>にじ</sup>が立ちまし

て、盛りの藤の花と、つゝじと一所に、お庭の池に影の映りましたのが、薄紫の頭で、胸に炎の褸みました、真紅なつゝじの羽の交つた、其の虹の尾を曳きました大きな鳥が、お二階を覗いて居りますやうに見えたのでございます。其の日は、御前様のお留守、奥様が欄干越に、其の景色をお視めなさいまして、——あゝ、綺麗な、此の白い雲と、蒼空の中に漲つた大鳥を御覧——お傍に居りました私に然うおつしやいまして——此の鳥は、頭は私の簪に、尾を私の帯に成るために来たんだよ。角の九つある、竜が、頭を兜に、尾を草摺に敷いて、敵に向ふ大將軍を飾つたやうに。……けれども、虹には目がないから、私の姿が見つからないので、頭を水に浸して、うなだれ悄れて居る。どれ、目を遣らう——と仰有いますと、右の中指に嵌めておいで遊ばした、指環の紅い玉でございます。開いては虹に見えぬし、伏せては奥様の目に見えませぬ。ですから、其の指環をお抜きなさいまして。

紳士 うむ、指環を抜いてだな。うむ、指環を抜いて。

侍女 そして、雪のやうなお手の指を環に遊ばして、高い処で、青葉の上で、虹の膚へ嵌めるやうになさいますと、其の指に空の色が透通りました、紅い玉は、颯と夕日に映つて、まつたく虹の瞳に成つて、そして晷々と輝きました。其の時でございます。お

庭も池も、真暗まつくらに成つたと思ひます。虹も消えました。黒いものが、ばつと来て、目潰つぶしを打ちますやうに、翼を拵つむげたと思ひますと、其の指環を、奥様の手から攫さらひまして、鳥が飛びましたのでございます。露つゆに光る木の実みだ、と紅あかい玉を、間違へたのでございませう。築山つぎやまの松の梢こずえを飛びまして、遠くも参りませんで、塀の上に、此の、野すえの末の処へ入ります、真赤な、まん円な、大きな太陽様の前に黒く留とまつたのが見えたのでございます。私は跣足はだしで庭へ駈かけ下りました。駈かけつけて声を出しますと、鳥は其のまゝ塀の外へ又飛びましたのでございます。丁ちやうど其その処が、裏木戸うらぎどの処でございませう。あの木戸は、私わたしが御奉公申しましてから、五年と申しますもの、お開あけ遊あべした事と云つては一度もなかつたのでございます。

紳士 うむ、あれは開あけるべき木戸ではないのぢや。俺が覚えてからも、止やむを得ん凶事おんじで二度だけは開あけなければ成らんぢやつた。が、其とても凶事おんじを追おいだいたばかりぢや。外から入つて来た不祥ふしやうはなかつた。——其が其の時、汝きさまの手で開あいたのか。

侍女 え、錠の鍵は、がつちりさゝつて居おりましたけれど、赤錆あかさびに錆さび切きりまして、圧おしめすと開あきました。くされて落ちたのでございます。塀の外に、散歩らしいのが一人立つて居たのでございます。其の男が、鳥の嘴くちばしから落おちしました奥様の其の指環を、掌てのひらに

載せまして、凝と見て居ましたのでございます。

紳士 餓鬼め、其奴か。

侍女 えゝ。

紳士 相手は其奴ぢやな。

侍女 あの、私がわけを言つて、其の指環を返しますやうに申しますと、申戯らしく、

否、此は、人間の手を放れたもの、鳥の嘴から受取つたのだから返されない。尤も、鳥

にならば、何時なりとも返して上げよう——と然う申して笑ふのでございます。それで

も、何うしても返しません。そして——確に預る、決して迂散なものでない——と云つ

て、丁と、衣兜から名刺を出してくれました。奥様は、面白いね——とおつしやいまし

た。それから日を極めまして、同じ暮方の頃、其の男を木戸の外まで呼びましたので

ございます。其の間に、此の、あの、鳥の装束をお詔へ遊ばしました。そして私が

それを着て出まして、指環を受取りますつもりなのでございましたが、なぶつて遣らう、

とおつしやつて、奥様が御自分に鳥の装束をおめし遊ばして、塀の外へ——でも、ひよ

つと、野原に遊んで居る小児などが怪しい姿を見て、騒いで悪いと云ふお心付きから、

四阿へお呼び入れに成りました。

紳士 奴は、あの木戸から入つたな。あの、木戸から。

侍女 男が吃驚するのを御覽、と私にお嘔きなさいました。奥様が、鳥は脚では受取らない、とおつしやつて、男が掌にのせました指環を、此処をお開きなさいまして、（咽喉のあく処を示す）口でおくはへ遊ばしたのでございます。

紳士 口でな、最う其の時から。毒蛇め。上頤下頤へ拳を引掛け、透通る歯と紅

さいた唇を、めりめりと引裂く、売婦。（足を挙げて、枯草を踏蹂る。）

画工 うゝむ、（二声ばかり、夢に魘されたるものの如し。）

紳士 （はじめて心付く）女郎、此方へ来い。（杖を以て一方を指す。）

侍女 （震へながら）はい。

紳士 頭を着ける、被れ。俺の前を鳥のやうに躍つて行け、——飛べ。邸を横行する黒いものの形を確と見覚えて置かねばならん。躍れ。衣兜には短銃があるぞ。

侍女、鳥の如く其の黒き袖を動かす。をのゝき震ふと同じ状なり。紳士、あとに続いて入る。

三羽の鳥 （声を揃へて叫ぶ）おいらのせゐぢやないぞ。

一の鳥 （笑ふ）はゝゝゝ、其処で何と言はう。

二の鳥 せう事はあるまい。矢張り、あとは、鳥の所為だと言はねば成るまい。

三の鳥 すると、人間のした事を、俺たちが引被るのだな。

二の鳥 かぶらうとも、背負はうとも。かぶつた処で、背負つた処で、人間のした事は、

人間同士が勝手に夥間うちで帳面づらを合せて行く、勘定の遣り取りする。俺たちが構

ふ事は少しもない。

三の鳥 成程な、罪も報も人間同士が背負ひつこ、被りつこをするわけだ。一体、此の

たびの事の発源は、其処な、お一どのが悪戯からはじまつた次第だが、さて、恚うな

れば高い処で見物で事が済む。嘴を引傾げて、ことんくと案じて見れば、われらは、

これ、余り性の善い夥間でないな。

一の鳥 いや、悪い事は少しもない。人間から言はせれば、善いとも悪いとも言はうがまゝ

だ。俺は唯屋の棟で、例の夕飯を稼いで居たのだ。処で艶麗な、奥方とか、それ、

人間界で言ふものが、虹の目だ、虹の目だ、と云ふものを（嘴を指す）此の黒い、鼻の

先へひけらかした。此の節、肉どころか、血どころか、贅沢な目玉などはつひに賞

翫した験がない。鳳凰の髓、麒麟の腮さへ、世にも稀な珍味と聞く。虹の目玉だ、

やあ、八千年生延びろ、と逆落しの廂はづれ、鶉越を遣つたがよ、生命がけの仕

事と思へ。鳶とびなら油揚あぶらげも攫さらはうが、人間の手に持ったまゝを引手ひつたく繰る段は、お互に得え手でない。首尾よく、かちりと銜くわへてな、スポンと中庭を抜けたは可よかつたが、虹の目玉と云ふ件くだんの代ものは何どうだ、齒も立たぬ。や、堅こいの候そうろうの。先祖以来、田螺たにしを突つつくに鍊きたへた口も、さて、がつくりと参まつたわ。お庇かげで舌したの根が弛ゆるんだ。癩しやくだがよ、振放ふりはなして素飛すつとばいたまでの事だ。な、其もが源もとで、人間が何をせうと、彼かをせうと、薩張さつぱり俺えが知しつた事ではあるまい。

二の鳥 道理かな、説法せつぽうかな。お釈迦しやくかさま様より間違まちがひのない事を云ふわ。いや、又いちどのの指環くわを銜くわへたのが悪わるければ、晴はれ上あがつた雨も悪わるし、ほかくとした陽氣やうきも悪わるし、虹にじも悪わるい、と云はねば成らぬ。雨や陽氣やうきがよくないからとて、何どうするものだ。得えての、空そらに美しい虹の立つ時は、地ちにも綺麗きれいな花はなが咲くよ。芍薬しやくやくか、牡丹ぼたんか、菊きくか、猿えが折みつて蓑みのにさす、お花畑はなばたのそれなし不思議な花はなよ。名も知れぬ花はなよ。雑ざつと虹のやうな花はなよ。人間の家やの中に、然そうした花はなの咲くのは壁かべにうどんげの開ひらくとおなじだ。俺えたちが見れば、薄暗うすくい人間界にんげんに、眩まぶしい虹のやうな、其もの花はなのパツと咲いた処ところは鮮麗あざやかだ。な、家を忘れ、身を忘れ、生命いのちを忘れて咲く怪あやしい花はなほど、美しい眺望ながめはない。分わけて今度いまの花は、お一いちどのが蒔まいた紅あかい玉たまから咲いたもの、吉野紙よしのがみの霞かすみで包かんで、露つゆをかため

た硝子の器の中へ密と蔵つても置かうものを。人間の黒い手は、此を見るが最後掴み散らす。当人は、黄色い手袋、白い腕飾と思ふさうだ。お互に見れば真黒よ。人間が見て、俺たちを黒いと云ふと同一かい、別して今来た親仁などは、鉄棒同然、腕に、火の舌を擽めて吹いて、右の不思議な花を微塵にせうと苛つて居るわ。野暮めがな。はて、見て居れば綺麗なものを、仇花なりとも美しく咲かして置けば可い事よ。

三の鳥 なぞとな、お二めが、体の可い事を吐す癖に、朝鳥の、朝桜、朝露の、朝風で、朝飯を急ぐ和郎だ。何だ、仇花なりとも、美しく咲かして置けば可い事だ。からくからと笑はせるな。お互に此処に何して居る。其の虹の散るのを待つて、やがて食はう、突かう、嘗めう、しやぶらうと、毎夜、毎夜、此の間、……咽喉、嘴を、カチくと嚙鳴らいて居るのでないかい。

二の鳥 然ればこそ待つて居る。桜の枝を踏めばと云つて、虫の数ほど花片も露もこぼさぬ俺たちだ。此のたびの不思議な其の大輪の虹の台、紅玉の蕊に咲いた花にも、俺たちが、何と、手を着けるか。雛芥子が散つて実に成るまで、風が誘ふを視て居るのだ。色には、恋には、情には、其の咲く花の二人を除けて、他の人間は大概風だ。中にも、ぬしと云ふものはな、主人と云ふものはな、淵に棲むぬし、峰にすむ主人と同じ

で、此が暴風雨よ、旋風だ。一溜りもなく吹散らす。あゝ、無慙な。

一の鳥 と云ふ嘴を、こつこつ鳴らいて、内々其の吹き散るのを待つのは誰だ。

二の鳥 はゝゝはゝゝ、俺達だ、はゝゝはゝゝ。先づ口だけは体の可い事を言うて、其の実はお互に餌食を待つのだ。又、此の花は、紅玉の蕊から虹に咲いたものだが、散る時は、肉に成り、血に成り、五色の腸と成る。やがて見ろ、脂の乗つた鮫鰈のひも、と云ふ珍味を、つるりだ。

三の鳥 何時の事だ、あゝ、聞いただけでも堪らぬわ。(ばたくと羽を煽つ。)

二の鳥 急ぐな、どつち道俺たちのものだ。餌食が其の柔かな白々とした手足を解いて、木の根の塗膳、錦手の木の葉の小皿盛と成るまでは、精々、咲いた花の首尾を守護して、夢中に躍跳ねるまで、楽ませて置かねば成らん。綱で捕つたと、釣つたとは、鯛の味が違ふと言はぬか。あれ等を苦ませては成らぬ、悲ませては成らぬ、海の水を酒にして泳がせろ。

一の鳥 むゝ、其処で、椅子やら、卓子やら、天幕の上げさげまで手伝ふかい。

三の鳥 彼れほどのものを、(天幕を指す) 持運びから、始末まで、俺たちが、此の黒い翼で人間の目から蔽うて手伝ふとは悟り得ず、薄の中に隠したつもりの、彼奴等の甘

さが堪らん。が、俺たちの為す処は、退いて見ると、如法これ下女下男の所為だ。天が下に何と鳥ともあらうものが、大分権式を落すわけだな。

二の鳥 獅子、虎、豹、地を走る獣。空を飛ぶ仲間では、鷲、鷹、みさごぐらゐなものか、餌食を掴んで容色の可いのは。……熊なんぞが、あの形で、椎の実を拝んだ形な。鶴とは申せど、尻を振つて泥鰻を追懸ける容体などは、余り喝采とは参らぬ図だ。誰も誰も、食ふためには、品も威も下げると思へ。然ままでにして、手に入れる餌食だ。突くと成れば会釈はない。骨までしやぶるわ。餌食の無慙さ、いや、又其の骨の肉汁の旨さはよ。(身震ひする。)

一の鳥 (聞く半ばより、じろく〜と酔臥したる画工を見て居り) おふた、お二どの。

二の鳥 あい。

三の鳥 あい、と吐す、魔ものめが、ふて／＼しい。

二の鳥 望みとあらば、可愛い、とも鳴くわ。

一の鳥 いや、串戯は措け。俺は先刻から思ふ事だ、待設けの珍味も可いが、こゝに目の前に転がつた餌食は何うだ。

三の鳥 其の事よ、血の酒に酔ふ前に、腹へ底を入れて置く相談には成るまいかな。何

分にも空腹だ。

二の鳥 御同然に夜食前よ。俺も一先に心付いては居るが、其の人間は未だ食頃には成らぬと思ふ。念のために、面を見ろ。

三羽の鳥、ばさくと寄り、頭を、手を、足を、ふんくと嗅ぐ。

一の鳥 堪らぬ香だ。

三の鳥 あゝ、旨さうな。

二の鳥 いや、まだ然うは成るまいか。此の齒をくひしばつた処を見い。総じて寝て居ても口を結んだ奴は、蓋をした貝だと思へ。うかつに嘴を入れると最後、大事な舌を挟まれる。やがて意地汚の野良犬が来て舐めよう。這奴四足めに瀬踏をさせて、可い事成つて、其の後で取蒐らう。食ものが、悪いかして。脂のない人間だ。

一の鳥 此の際、乾ものでも構はぬよ。

二の鳥 生命がけて乾ものを食つて、一分が立つと思ふか、高時絵のお着を待て。

三の鳥 や、待つと云へば、例の通り、ほんのりと薰つて来た。

一の鳥 おゝ、人臭いぞ。そりや、女のにほひだ。

二の鳥 はて、下司な奴、同じ事を不思議な花が薰ると言へ。

三の鳥 おゝ、蘭奢待、蘭奢待。

一の鳥 鈴ヶ森でも、此の薫は、百年目に二三度だつたな。

二の鳥 化鳥が、古い事を云ふ。

三の鳥 なぞと少い気で居ると見える、はゝはゝ。

一の鳥 いや、恚うして暗やみで笑つた処は、我ながら不気味だな。

三の鳥 人が聞いたら何と言はう。

二の鳥 烏 鳴だ、と吐す奴よ。

一の鳥 何にも知らずか。

三の鳥 不便な奴等。

二の鳥 (手を取合うて) おゝ、見える、見える。それ侍女の気で迎へて遣れ。(みづ

から天幕の中より、燭したる蠟燭を取出だし、野中に黒く立ちて、高く手に翳す。一

の鳥、三の鳥は、二の鳥の裾に踞む。)

薄の彼方、舞台深く、天幕の奥斜めに、男女の姿立 顕る。一は少紳士、一は貴

夫人、容姿美しく輝くばかり。

二の鳥 恋も風、無情も風、情も露、生命も露、別るゝも薄、招くも薄、泣くも虫、歌ふ

も虫、跡は野原だ、勝手に成れ。（怪しき声にて呪す。一と三の鳥、同時に跪いて天を  
 拝す。風一陣、灯消ゆ。舞台一時暗黒。）

はじめ、月なし、此の時薄月出づ。舞台明く成りて、貴夫人も少紳士も、三羽の鳥  
 も皆見えす。天幕あるのみ。

画工、猛然として覚む。

覽はれたる如く四辺を、はし、慌しく画の包をひらく、衣兜のマツチを探り、枯草

に火を点ず。

野火、炎々。絹地に三羽の鳥あらはる。

凝視。

彼処に敵あるが如く、腕を挙げて睥睨す。

画工 俺の画を見る。——待て、しかし、絵か、其とも実際の奴等か。

——幕——





# 青空文庫情報

底本：「日本幻想文学集成1 泉鏡花」国書刊行会

1991（平成3）年3月25日初版第1刷発行

1995（平成7）年10月9日初版第5刷発行

底本の親本：「泉鏡花全集」岩波書店

1940（昭和15）年発行

初出：「新小説」

1913（大正2）年7月

※ルビは新仮名とする底本の扱いにそって、ルビの拗音、促音は小書きしました。

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ヶ」（区点番号586）を、大振りにつくっています。

入力：門田裕志

校正：川山隆

2009年5月10日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 紅玉

## 泉鏡花

2020年 7月18日 初版

### 奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>